

(平面波の表現について)

物理量 $\phi(\mathbf{r}, t)$ が, ϕ_0, ω を定数, \mathbf{k} を定ベクトルとして

$$\phi(\mathbf{r}, t) = \phi_0 e^{i(\omega t - \mathbf{k} \cdot \mathbf{r})} \quad (1)$$

で表されるとき, 平面波という。実際の物理量は実数部 (または虚数部) で表され

$$\phi(\mathbf{r}, t) = \phi_0 \cos(\omega t - \mathbf{k} \cdot \mathbf{r}) \quad (2)$$

であるから, ϕ_0 が振幅である。位相一定の波面は

$$\mathbf{k} \cdot \mathbf{r} = \text{一定} \quad (3)$$

で与えられるから, これをみたす点 \mathbf{r} の集合, すなわちベクトル \mathbf{k} に直交する平面であり, ベクトル \mathbf{k} の方向が波の進行方向を表す。波の振動数 ν , 周期 T , 波長 λ , 速さ c は

$$\nu = \frac{1}{T} = \frac{\omega}{2\pi}, \quad \lambda = \frac{2\pi}{|\mathbf{k}|}, \quad c = \nu\lambda = \frac{\omega}{|\mathbf{k}|} \quad (4)$$

で与えられる。角振動数 $\omega = 2\pi/T$ に対して, $|\mathbf{k}| = 2\pi/\lambda$ を波数という。

複素数による表現が便利であるのは, 微分が

$$\frac{\partial}{\partial t} \phi(\mathbf{r}, t) = i\omega \phi(\mathbf{r}, t) \quad (5)$$

$$\frac{\partial}{\partial x} \phi(\mathbf{r}, t) = -ik_x \phi(\mathbf{r}, t) \quad \text{etc. より} \quad \nabla \phi(\mathbf{r}, t) = -i\mathbf{k} \phi(\mathbf{r}, t) \quad (6)$$

となり, 微分演算を以下の代数演算で置き換えればすむことである:

$$\frac{\partial}{\partial t} \rightarrow i\omega, \quad \nabla \rightarrow -i\mathbf{k} \quad (\text{スカラー積, ベクトル積ともに適用される}) \quad (7)$$

これを用いれば, 平面波は波動方程式

$$\frac{1}{c^2} \frac{\partial^2}{\partial t^2} \phi = \nabla^2 \phi, \quad \nabla^2 = \frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2} \quad (8)$$

の特解であることがすぐにわかる。一般解は平面波の重ね合わせ (フーリエ級数) で表すことができる。

物理量がベクトル量であるときは, 平面波は

$$\mathbf{a}(\mathbf{r}, t) = \mathbf{a}_0 e^{i(\omega t - \mathbf{k} \cdot \mathbf{r})} \quad (9)$$

と書かれ, この場合, 振幅ベクトル \mathbf{a}_0 と波数ベクトル \mathbf{k} の直交関係によって

$$(\text{横波}) \quad \mathbf{k} \cdot \mathbf{a}_0 = 0 \quad \text{したがって} \quad \nabla \cdot \mathbf{a} = 0 \quad (10)$$

$$(\text{縦波}) \quad \mathbf{k} \times \mathbf{a}_0 = 0 \quad \text{したがって} \quad \nabla \times \mathbf{a} = 0 \quad (11)$$

に分解される。 $\nabla \cdot \mathbf{E} = \nabla \cdot \mathbf{H} = 0$ が成り立つ電磁場では, 横波成分しか存在しない。